

様式 2

県立高等学校重点校制度に係る成果報告書

学校名 鳥取県立倉吉東高等学校

重点項目	探究学習重点校	提出日	令和5年4月19日
------	---------	-----	-----------

1 学校目標	
世界市民として、豊かな文化の創造、民主的な社会及び平和的な国際社会の形成に進んで貢献することのできる、知・情・意を兼ね備えた、自主的・自律的で、生きる力に満ちた生徒を育成する。	
2 重点項目に係る目標・成果	
目標	成果
<ul style="list-style-type: none"> ・アナログとデジタルをバランスよく活用して知識や技術を身につけ、それらを日常生活や他教科と横断的に結びつけながら探究的に学ぶことにより、グローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を図る。 ・社会奉仕と環境問題に取り組み、地域に開かれた学校づくりを進めるとともに、生徒が主体的に地域貢献・国際貢献が行えるような指導を行う。 <p><数値目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際シンポジウム出場 5グループ以上 ・REHSE 高校生環境教育発表会全国大会出場 ・鳥取県理数探究発表会入賞 ・1年次総合的な探究の時間（ミニ探究）とIB教育の手法との融合と試行授業の実施回数 5回以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・探究活動ではすべての探究グループが Google Classroom をプラットフォームにしながら実践を行った。倉吉の方言や三朝温泉等の地域の資源を題材とする探究活動を行い、その成果を校内外に発信するなどローカルとグローバルを結び付けた活動を行うことができた。また、その内容の一部が日本女性会議で発表され、指導助言者から好評を得た。 ・社会奉仕や環境問題については1年生の総合探究でIBのコア科目であるCASの理念を通して説明し、奉仕活動を自ら選び、実践・振り返りを行った。 <p><数値結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際シンポジウムには、3グループが出場し、内1グループがスライド部門で優秀賞を受賞した。目標の5グループ以上の出場はできなかった。 ・REHSEでは、1グループがエントリーし、3月に東京大学で行われた全国大会に出場した。 ・鳥取県理数探究発表会では、1グループ・1個人（1年生）の計3名が出場したが、入賞できなかった。 ・1年次の探究の時間にIBのコア科目（従来の論文作成に加え、TOKの考え方やCASの奉仕活動の推奨）に試行的に取り組んだが、新型コロナによる臨時休業等の影響により十分にはできなかった。一方で、学園祭のプレゼンテーション・コンテストにTOKの手法を取り入れ、学校全体に広げることとした。また、試行授業については、「公共」、「科学と人間生活」において通年で実施するとともに、岡山理科大学によるIB探究ラボを9月14日に実施した。
3 実施事業	

【高等学校課事業】

■新しい学びの創造事業

- ・「主体的・対話的で深い学び」教員スキルアップ事業

1人1台端末が導入2年目となり、教員からChromebookそのものの使い方の質問を受けることが少なくなった。次の段階として、端末を活用した授業の「質的変容」を目指し、ICT活用を授業改革の一環として10月に「学びウィーク」を開催し、保護者・地域住民等へ日常的な、ICT活用を公開した。生徒に身につけさせる資質や能力、またそれらの評価について関西大学中等部・高等部の松村教頭先生を7月15日及び10月11日・12日に招聘し、観点別評価の考え方や方法についての研究を行った。

- ・生徒の思考力・判断力・表現力の強化のためのハイレベル講座

灘中高等学校の井上志音先生を招聘し、「TOK とは何か」「TOK プレゼンテーション」の進め方を講演及びオンライン指導を生徒対象に行った。成果を学園祭で発表し、評価とフィードバックをいただくことで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることができた。また、講師との打ち合わせを学園祭実行委員が行うなど、主体的学習者の育成の機会にもなった。

【独自事業】

■探究活動推進事業

- ・探究活動の実施

活動にともなうテキスト、実験器具、試薬、道具、書籍、文具等の消耗品を購入し、探究活動の充実につなげることができた。

- ・探究活動の充実（1）（大学研究室訪問、地域における探究活動）

探究活動の動機付けや活動内容について質疑応答の時間を持ち、探究活動をより深化させることを目的に、大学研究室訪問を行った。また、地域の特色や諸問題に関する探究を行うグループは、校外に出て実地でのリサーチを行った。行先として、教育系は島根大学、自然科学系は鳥取環境大学、工学系は鳥取大学に出向いた。いずれも大学教員から有益なフィードバックをいただき、探究成果発表につなげたり、生徒の思考力の育成につなげることができた。

- ・探究活動の充実（2）外部大会への応募、発表会参加

生徒に県内外で行われる学会やコンテストでの成果発表への参加を促した。主のものをあげると、生物チャレンジは過去最高となる6名が出場した。高校生国際シンポジウムでは3グループが出場し、1グループがスライド部門で優秀賞を受賞した。REHSE では、1グループがエントリーし、3月に東京大学で行われた全国大会に出場した。鳥取県理数探究発表会では、1グループ、1個人が出場した。

- ・中間発表会

9月28日（水）、探究活動の中間発表会をポスターセッションの形式で行った。発表後の探究活動がより充実したものになるような助言や批評を得るために、鳥取大学塩沢教授、鳥取短期大学野津教授、鳥取環境大学吉永教授、グローバルアカデミー岡本理事長を招聘し、研究方針の修正や調査活動の充実に取り組みせることによって学習の深化につなげていくことができた。

- ・成果発表会

探究活動の成果発表会は、2月1日（水）に他校の教員、地域住民及び保護者も対象にして実施した。ポスターセッションの形式では発表者と聴衆を近づけ、探究内容に関する活発な質疑応答を通して交流を深めた。本校生徒と海外高校生との共同研究では、スライド発表形式で参加者全員に対して成果発表を行った。生徒たちは発表を通して表現力の育成につなげることができたとともに、活発な質疑応答が行われた。

- ・探究活動教職員研修会

9月28日の中間発表会後の放課後に、グローバルアカデミー理事長岡本氏による教員研修を実施した。講師から改めて探究活動の意義や可能性を学ぶとともに、本校の探究活動の質について振り返り、日頃の活動の課題や疑問を解決するよい機会となった。

■社会につながる体験事業

- ・著名人講演会

講師に鳥取環境大学副学長の小林朋道教授を招き、11月9日（水）に本校で講演会を実施した。

小林教授の話を聞いて、生徒は好きな研究、仕事に徹底的に没頭すること、探究的に追求することの魅力を感じることができ、今後のキャリア形成の一助となった。

■Chromebook と Google Workspace 活用教育実践事業

・先進校視察

予算計上とコロナ禍のため、Google 認定校を訪問することはできなかった。福光校長をはじめ3名の職員が Google Education の発表校として ED - TECH に参加し、学校業務の効率化や授業実践等を発表した。GEG 倉吉を立ち上げ、ICTを活用して実践する教育の教育論や手法について、学校種を問わない自由な学びの場を立ち上げたが、多忙なため定期的な開催には至っていないのが現状である。Google 教育認定校に手を挙げているが、予算不足等の理由により十分な実践に至っていない。

4 総合所見 (成果・評価)

・探究活動の成果は職員研修や「課題研究メソッド (啓林館)」の活用により向上しつつある。レベルが高い発表は、参考文献を読み込んで先行研究を吟味しながら、分析・結論・評価をまとめている優秀な論文や発表が増えてきた。また、探究担当の教員の努力で、外部コンテストの参加数が例年以上に伸び、発表内容の向上は見られている。一方で、数値目標である出場数や入賞数は達成できておらず、一層の質の向上を図る必要がある。原因としては、探究テーマとしては面白いが、参考文献や引用が不十分であるため、深みのある結論に導けてないもの、研究テーマが高校レベルを超えているため、実験設備等が不十分で結果が得られなかったものなど外部での発表に至らなかった生徒が多かった。課題として、テーマ・リサーチクエストの設定時に、文献調査を呼びかけたものの、全体として図書貸出増には十分に結びついておらず、ネットでの引用を多用した論文が多いことがあげられる。総合的な探究の時間においても各教科の授業においても、教員がすべてを教えなければ生徒は動かないという発想が拭えなかったことが一因だと考える。結果として、生徒の主体性の育成にまでは至らなかった。また、探究活動と教科のつながり、キャリア形成とのつながりがもてなかった生徒もあり、探究活動の活動自体を活性化する必要がある。

・来年度に向けては、①IB ワールドスクール認定校としてコア科目の要素を取り入れる、②生徒が主体的に動くことができる環境づくり、③教科担当のサポート・コーチングとしての形態による探究と各教科とのつながりの強化、④生徒の情報収集・批判的思考と分析能力の育成のための図書館機能の強化、⑤イノベーションを創生できるための最先端技術との出会いと個別最適化、を充実させ、探究活動の質の向上と生徒の佐更なる主体的な取組を目指していきたい。具体的には、TOK・CAS・EE のガイダンスを1年次生の総合的な探究の時間に組み込む。その際に、学校目標から遡った形で探究の目標を明示しながら授業運営していく。また、分掌を再編し新たな分掌「共同運営部」を立ち上げ、探究活動を全般的に俯瞰しながら、生徒主体の学びになるよう学校全体で取り組む体制に切り替える。

※枚数任意